

〔Ⅱ〕 政治経済分野の小論文指導

川 田 基 生

はじめに

ここ数年、中学3年の公民的分野ではレポートの作成、高校3年の政治経済では授業中の作文を通じた教科指導をしてきました。作文の指導と言うと文章表現、文彩を連想しがちですが、私は主として、生徒各人固有の題材の選び方、あつかい方に興味を持っています。中学生、高校生は政治や経済について何を語るべきだろうか。今回は特に、統計数値からの発想の多様性について考えてみました。

I

質問。「レポートを書く上でどんなことに苦心しましたか」

A (AからIまでは中学3年) 何かと時間がかかりすぎます。

B レポートの題にする適当な材料が探しにくかった。

C レポートを製作する上での苦労は本を選ぶことである。やっぱり一つの完成品を製作するには自分自身がおもしろいと思えないといけない。つまらなかつたら同じ一時間を費しても効果は半減してしまう。だから自分自身読んでいておもしろいと思う本を選ぶ。これが重労働なのである。

D レポートのまとめ方がむずかしい。まとめている途中少々の疑問は無視して次に進む。そうしないと先に進まないから。そのために、いざレポートが完成して見なおそうと思うと、次々と疑問がでてくる。

E レポートにするような問題を見つけること。

F 自分にあうようにレポートをまとめること。

G 一番最初に苦労したことは、何について調べたらよいか、あまりにも調べ考えたいことが多かったので。

このような生徒のレポート作成上の困難点を、私はロラン・バルトの「修辞学の木」で分類してみました。

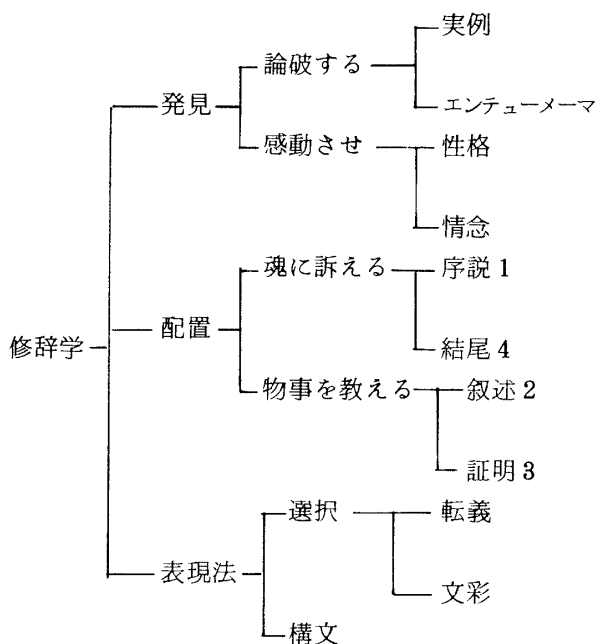
「修辞学」の木を説明すると…

《発見》というのは、「何を語るべきか。」いうべきことを見出すことであり、発想、立案、論題を見つけること。

《配置》というのは、見出したことを順序づけること。

《表現法》というのは、文彩を加えること。文体。

生徒の文章を考える上での苦心は《発見》のところ



ロラン・バルドによる「修辞学」の木

に多くあるように思われます。

なぜそうなるのか。現行の教科構造の中では、作文は、国語科の一領域としての文章表現指導とされ、《表現法》は相当程度指導されており、文体の問題は、生徒にとって困難であるとはいえ、予見されうるものとなっているのではないのでしょうか。

一方《配置》についても、起承転結など、国語でふれているようです。最近、大学入試で小論文がとりあげられるようになりましたが、生徒の小論文について「ここは重要だから詳しく書きなさい」とか、識別眼をもった配列への配慮というのは比較的、助言しやすい、でしょう。

しかし、レポートや小論文の良さ、おもしろさは、一人一人ちがう人間の思考の傾向であり、そこに含まれる発想の豊かさにかかわっているように思われます。そして生徒の苦心もそこにあるようです。だから私は、《発見》の部分についての指導を工夫してゆかなければならないと思います。

II

最初の試みは、生徒に質問を出させ、それに答える中で生徒の思考の芽をのばしてやろう、というものでした。(本校紀要第23集・拙稿)

H 質問。このたび、ふたたび公定歩合が引き下げられましたが、政府の目的は、不況なので公定歩合を下げ、経済活動を活発にすることだとばかりは思いません。しかし公定歩合を下げれば、よけいにインフレがひどくなるのではないのでしょうか。政府は、景気さえ回復すれば、少々インフレがひどくてもいいと思っているのでしょうか。新聞をよんでいろいろ考えましたが、どうもぼくには、よくわかりません。どうか、わかりやすく説明してください。(昭和50年10月28日)

私の答えは、「その通りです。少々のインフレよりも、失業者や倒産を少なくすることを優先しようとしています。私が心配するのは、インフレだけ激しくなると、景気がよくなる、かもしれない、ということです。インフレ政策で物がふえれば景気も回復、というのは、石油など資源が無制限でなくなっている現在、昔のような成長ができるのか、どうでしょう。」

I しばらくして同じ生徒がこんな質問をしました。保釈金というのは、法律で認められているのですか。もし認められているとすれば、金持ちの人の方が有利となり、日本国憲法、第14条の法の下に平等に違反するのではないですか。

私の答えは、刑事訴訟法 207 条、93 条、など示したものでした。

もっといい解答を与えることはできなかつたか、という反省以上に私が考えこんでしまったのは、この質問と助言が、生徒Hのレポート作成にほとんどプラスになっていないことです。

生徒Hのレポートの題は「労働運動の歴史」であり、内容は、労働組合が初めてできたのはいつごろのことか。英国で労働運動がおこなわれながら、国会が労働者のことを全く考えなかった理由。子供でも工場労働者になれた理由。労働者が解決しなければならない問題はすべて政治につながっていた。二千四百万人の人口の中でわずか十四万人だけが選挙権を持っていた、等でありました。

3ヶ月くらいの期間であっても、生徒は論題を数回は変化させる。その時、その時の生徒の質問に答えながら、ということは非常にむづかしい。

III

そこで、次に考えたのは、小論文、レポート作成の方法の指導ということでした。作文題材の各人固有のとり扱い方を育てる一般的方法とは、どんなものになるのだろうか。どんな主題が提示されても、真実らしい理由から導き出した結論を示せるようにする方法。

ロッキード疑獄での田中の容疑について知りたい生徒がいた場合、〔誰が、何が〕〔誰を、何を〕〔どこ

で〕〔誰の、何の助けで〕〔なぜ〕〔どのようにして〕〔いつ〕を明らかにするように、というやり方はどうでしょう。

「起訴状によると、田中は、1972年8月23日、東京目白台の私邸で、丸紅の桧山らから「トライスターを全日空に買わせるよう総理として尽力してほしい」と頼まれ、全日空のトライスター購入が実現した場合は報酬として5億円をもらう約束をしたうえで、購入決定後、5億円を受けとった(受託収賄)。同時にこの5億円の受領が、法定の手続を経ないため外為法違反とされた。」という助言は、生徒の勉強の機会をうばい、かつ教師の着想を押しつけるという点でよくない。

一つのテーマに対し、〔いつ〕〔どこで〕など論証を整理する間仕切りを用意する方法。多種の間仕切りを使った訓練を授業中にやる、というのは、大学受験にいそがしい高校3年生にとっても、比較的負担が軽く、短時間で可能でありましょう。

高校3年の政治単元の導入部分、現代における政治の役割を説明した授業の終りの十分程度で、生徒に、短い作文をさせました。

政治とは何か。〔どんな人々の対立か〕〔どのような利害、価値観を実現しようとしたか〕〔どんな調整、妥協があったか〕にふれつつ、具体的に述べよ。

J (J~Uは高校3年) 昨年(昭和54年)の衆議院総選挙後の、首班指名をめぐる大平さんと新自由クラブの河野洋平さんとの関係。大平さんは、首相になるために、衆議院での投票の際、新自由クラブの河野さんに、組閣の時に、一人新自クから大臣にしましょう(結局これはだめでしたが)という条件で新自クの票をいただいた。この時、大平さんは、どうしても首相になりたいということで、自民党内で三木さん、中曽根さん、福田さんと対立した。

K とてもむづかしくて、具体的にといわれてもわからないんです…。これでよいのかどうかわからないけれども早大の入試のろうえい事件の場合だと、自分の子供を早大に入れたいばかりに、たくさんのお金を出して、もんだいの答えのコピーを関係者にもらったのだからけれどもネ誰と対立しているのかはよくわかりません。うーむづかしいですね、すいません。

L 昨年来の“附高時報”誌上の君が代問題とは、報道局員の既成概念破壊によるヒロイズムと、放送局員の問題提起が対立し、調整、妥協のないまま、報道局にもみ消された。

M おこづかいの値上げ 私←親 毎度失敗におわる。請求を実施する時にはいろいろ対策をたてるが、いつも親の方が一枚上手。

政治とは何か、具体例をあげて述べよ、よりも〔階級対立〕〔価値観〕〔妥協はどのようにおこなわれたか〕という間仕切りを用意した方が、考えやすくなる。アフガニスタン問題について、私はこう考えるが、一方こんな考えもある、みんな自由に思ったことを述べなさい、といったアイテアの例示よりも、間仕切りの設定の方が、生徒の自由な思考を可能にするのではないだろうか。そして、生徒は政治について、考える時、どんなテーマであっても、この間仕切りが使えるのではないだろうか。一方、私の方では、多種の間仕切りを用意し、生徒を訓練してゆく、という方法がとれないだろうか。

Ⅳ

発想の手がかりはいろいろありそうですが、今回は統計数値の見方について少しふれてみます。

昨年六月下旬、高校3年の政治経済の授業で、政治的無関心の単元。こんな質問を出して、50字前後にまとめさせました。

「1936年のスターリン憲法の制定時に、ソ連では、草案のコピーが6000万部つくられ、527,000回の討論会が開かれ、3650万人が参加し、修正提案が134,300出された。ソ連の大衆は政治的な関心が強いのだろうか。あなたの考えを述べなさい。」

N コピーや討論集会の参加者数だけでは、いやいやながらでもできると思いますが、修正提案の、134,300という数はたいへん多く、やはり関心がなければ、修正提案はでないと思う。

O 討論会は学習会のようなもので、民衆に憲法を浸透させるために開かれたのだし、修正案により修正されたか疑問である。

P ソ連の人口2億で、参政者を少なく見つっても一億とすると、集会参加者は約37%にあたる。修正案の6000万分の135,000など0.2%にすぎず、関心が強いとは思わない。

Q 数値を見た限りでは、いちおう関心は強いと言える。ソ連のような国では、圧力が強く、その反動でこのような数値かでるに至ったのではないか。政治的関心といっても、心の奥底での受けとり方は、私たちが持つ関心とはどこか異った性質があるようにも思う。

R ……あまりに大きな数字は、かえって衆愚的なところかうかがえる。…

S ソ連の政治体制はあまりよく知らないが、この結果から見る限りでは、大衆の政治的関心は非常に大きいものに思える。

T ソ連はいろいろな民族がいるので、その人たちの意見の調整とかいろいろやっていたらこうなったのだろう。ソ連はやることなすことでっかいな。

U やっぱり関心が強いと思う。すくなくとも日本よりは強い。たしかにスターリンは自分の考えにあわない者をかたっぱしから排除して行って、およそ民主主義とは言いにくいような政治をおこなっていた。けれども民衆の「関心」はあったはずだ。自分の意見なんか聞いてくれないし、戦争はやるし、とても悪い時代だったかもしれない。けれど、悪いだけに、大衆の政治の実体を知ろうとする関心は強かったのではないか。

ロシア人の政治的関心は高いのか低いのか。130名の答えを見ると多種多様。同じ調査結果の数値を見ても解釈は一定の見解にまとまっていく、とは見えない。そのあたりに自然ではなく、社会を対象とする統計の特質があるのではないか。

社会現象をとらえていく上で、数的把握は大きな役割をはたすか、そこには制約がある。量は等質を前提とするが、社会現象は簡単には量化できない。生徒の意見の大部分は、ソ連社会と日本社会の異質性を意識しているが、それを意識させるのが社会統計の特質の一つであろう。

集会が何回ひらかれたといった統計数値は、ソ連政府がソ連社会の構造を反映するものとして調査発表したものであるが、社会を対象とする統計は一定の理論を背景に持っている。しかし社会科学の理論は価値判断から自由ではありえない。価値観の異なる人々は、そういう要素を批判し、再構成して考えようとすることになる。

ほんのいくつかの統計数値であっても、政治的無関心の問題について多くの論点を提供します。それは、今述べた社会統計の特質が、多様な発想を生む要因になっている、と私は考えます。

終りに

作文を用いる指導というのは、生徒からさし出された文章に一筆書きこんで返却、という以上に述べたてゝる事はないのかもしれませんが、ただ、私が重要なことと思うのは、時代の流れの中で、指導要領の内容が激変するであろう政治経済という教科にあって、一クラス44人の多様な意見に常に接していることは、教師として、人間として大切なことではないかということです。